

仮面ライダーリバイス  
Livea devil!

ちくわ丸

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

有象無象に現れる怪人「デッドマン」達と闘い続ける仮面ライダーの五十嵐三兄妹…しかしそんな中で、全国の女子高校生達をターゲットに襲われる怪奇事件が多発。リバイス達はある九人の「スクールアイドル」と呼ばれる者達を守る為に変身する！

# 目次

奇想天外！数奇な出会い！	1
繋がる思い！いざ闘い！	36
手と手を繋ぐ思い！リバイスのパワー！	60



奇想天外！数奇な出会い！

「正義ヒーロー！見参！」

「悪は絶対許さない！」

「弱い物いじめはダメ！」

「世界の平和は私が守る！」

「もう大丈夫!安心して!」

私の好きなもの、スーパーヒーロー  
ものすごく強くて、優しい、無敵の存在。

小さい頃から夢に焦がれてテレビから離れられなかった

そんな時、ある日突然自分の中の心が一つ「増えた」ような気がした。

いや、違う…

「菜々、私は…」

私が、そこから生まれた存在だったのだろうか

「弱い物イジメは、絶対許さない」

それは永遠に、分らない。

某ビル、最上階の頂上。

人類は経済や文化ともに急成長を遂げ、新しい時代を切り拓く最中だった。しかし、

その頂上にいる四人の人影は今の日本に鋭い牙を剥けようと栄える夜の街並みを見ていた。

「さあて…どうしようかなあ…!」

「そろそろやつちやいましょうか?」

「私も傾合いだと思っけれども…貴方はどう?」

おそらく手下と思われる三人の部下は前にいる一人の男にそう話を持ちかけている。見るからに危険な香りが漂う大柄の男、聡明でずる賢い細身の少年、女王と言わんばかりにとてつもない風格を出す少女…そんな三人の方へと振り返って彼はこう答えた。

「そうだね…ここまで付き合ってくれてありがとう」

「君たちの言う通り、いよいよ我々が本格的に計画を実行する時が来た。」



そう言いながらも彼は片手にスタンプのような物を取り出して起動させた。

「これはほんの些細な物だが、このギフスタンプが我々の宣戦布告の合図だ。大いなる、夢の為に……」

彼がスタンプを押したことにより、上空に巨大な空間の穴が現れ、そこから有象無象の怪人達が卵のように地上へと落ちていった。

この世では、勸善懲悪と呼ばれる言葉が存在している。

善事を勧め、悪事を懲らすこと。特に、小説・芝居などで、善玉が最後には栄え、悪玉は滅びるといふ筋書きによって示される、道徳的な見解にいう。

だがそれは物語上の話であり彼ら生きる世界でもそうなのか、本当の所は誰にも分からない

明確な正義と悪が対立する、そんな世界での物語が今始まる

「よしー」

東京。数々に並ぶ施設とは裏腹に、伝統と古き良き歴史を感じるその銭湯屋は今日も地元の人らで賑わって営んでいた。

特に抜きん出た評判ではないものの、銭湯で営む家族の暖かい雰囲気によって近所の人間からも愛される場所として知られている。

そして、その本店で生活している三兄妹は今日も生真面目に銭湯の切り盛りや掃除などに

力をいれていた。

「いつも悪いな。大二、さくら：せつかくの休日を手伝わさせてさ」

「別に大丈夫だって、特に今日はやる事ないし」

一輝の弟でありさくらの兄でもある五十嵐大二。さくらからは「大ちゃん」という愛称呼ばれている。何を隠そう大二ら政府特務機関・フェニックス中央方面隊分隊長として前線で戦う人間である。？シャイでプライドが高い性格だが頭脳明晰で運動能力も高い優等生で、ライブシステムの使用者として選出された彼なのだが、戦闘によりボロボロに破壊した施設に謝罪しに行くなど、結構な苦勞人（なお、被害の後始末はフェニックスが請け負う模様）??仲直りした後に一輝と共に一風呂浴びる程度には風呂好きだが、一輝とは異なり「先に世界を守る、そうすることで銭湯も守れる」と考えており、銭湯の仕事自体にはノータッチであったが今日は客の入りが異常に良い為、手伝いを快諾して今に至っている。

「そうだよ一輝兄、こんな事、いつもやってきたでしょ?」

五十嵐さくら。

一輝と大二の妹。優しい性格だがクールを装っている思春期真っ只中の女子高生である?心技体全てにおいて優れており、実は兄2人よりも大きな可能性を秘めているなど潜在性が高い人物。空手を習っているだけあって、護身術によつて不祥事を解決した経験を持つ。

「つーか…兄ちゃんっていつも手伝つてるよな。たまには休んでもいいのに」

「いいんだよ!五十嵐家の長男坊としてこれぐらいは当然だからさ!」

そして、その長男坊であり、銭湯「しあわせ湯」を営む五十嵐一輝

元々はサッカー選手として幾つものトロフィーを獲得する実力者で、プロも夢ではなかったそうだが、長男としての責務故か家業を継ぐ道を選択

趣味・特技は銭湯の掃除、釣り、サッカー。好物は唐揚げ、カレーライス、コーヒール牛乳。漢検・英検共に3級で、銭湯安全入浴アドバイザーの資格持ち。?サッカーに

関しては、小学生時代はU-15や全国少年サッカーで優勝& MVP受賞、高校時代は全日本で優勝という本当にプロ入りも夢ではなかった華々しい経歴が確認可能。

そんな三人はある秘密を胸に持っている。

『緊急怪異速報です。今日の朝中央区周辺で多数の怪人が出現。現在は立ち入り禁止区域に指定され、既に被害の発生が余儀なく…』

「大ニ！さくら！」

「うん！」

「ああ」

現在、東京では多数の怪人出現の現象が発生していた。謎の空間から大勢の怪人、「デッドマン」が現れては人民に危害を加えるなどなんとも不気味な怪異現象が最近では多くなりつつある。特務機関「フェニックス」は怪異対策部隊を動員するも、件数は

増えるばかりであった。

怪我人は軽傷を負うものの、死者数はいないと言ってもいい。なぜそれほどまで被害を抑える事が出来ているのか、

それは五十嵐三兄妹という存在があるからである。

「ハアツ！」

怪人が発生した中央区に向かった一輝達：バイクではなくママチャリで急いで駆けつけた彼らは人々を襲うデッドマンを蹴散らしていく。元々の身体能力が高い一輝や大二、さくらは生身でも雑魚のデッドマンをいなすのは造作もない事である。しかしな

がら今回の発生はいつもとは数が多いことに気づく

「今日はやたらと多いな！」

「こいつら、本当にしつこいんだけど！ハッ！」

「ああ、早く全滅させるぞ！バイス！」

バイスと呼ばれる「何か」に声をかける一輝は自信の耳から某ランプの魔人のような出方で現れるソイツは直様実体化した。

「ハイハイ！バイスちゃんだよー！」

「いつもの怪人退治だ！一気に行くぞ！」

「むッ！なるほどねー！今回も街の平和のために頑張りますかー、つとー！」

【リバイスドライバー!】

「さくら、俺たちも変身だ!」

「うん!」

三人はそれぞれ形状の違うドライバーを腰に巻きつけた。一輝は本当に力が湧いてきたかの如く身を強く構え始める

「湧いてきたぜ!」

【レックス!】

【バッド!】

【コブラ!】

一輝はいつもの台詞を叫ぶとレックスのバイスタンプを取り出す。大二是バッド、さくらはコブラとそれぞれ違うスタンプを出して機動させた。これこそ一輝達にとってのキーアイテムとなる【バイスタンプ】と呼ばれるもの。



三人はスタンプをドライバーに押印する

【カモン！レレレレックス！】

【Eeny, meeny, miny, moe~!? Eeny, meeny, miny, moe~!?】

【wats coming up! wats coming up!】

「変身！」

バイスタンプ本体を各ドライバーにある特定の場所セットして変身を開始する

【オーイングショーイングローリングゴーイング！仮面ライダー！リバイ！バイス！リバイス！】

【Precious! Trust us! Justis! バット！仮面ライダーライブ！】

【『Ah Going my way』仮面ライダー！蛇蛇蛇ジャンヌ！】

「ヒヤツホオオオ!!」

バイスも一輝が姿を変えると同時に「仮面ライダーバイス」としての姿へと変身する。同じくして大二やさくらも「仮面ライダーライブ」「仮面ライダージャンヌ」の基本形態へと姿を変えた。

政府特務機関・フェニックスお抱えの科学者・ジョージ・狩崎が開発したドライバー（さくらのリベラドライバーには彼の父が製作）と、彼の父がギフスタンプを基に開発したバイスタンプという2つのデバイスを中枢においた変身システム、所謂ライダーシステムと呼ばれている。

五十嵐家はその適正があるためかバイスタンプの力を応用してデッドマンに対抗する事が出来る為、狩崎の名の元で正式に使用する事が認められている。

一輝の体内に潜む悪魔は、ドライバーのコマンド入力よって実行される「バディアツプ」により分離。もう一人の「仮面ライダー」として実体化する。

「よっしやあく!久しぶりに暴れちゃおーつとお!」

「おいバイス!?勝手に行くなって!」

20022年の時代では

ぶはっ、と景気のいい音を立てて、学の多い時期である学園のとある生徒がは口からドリンクのボトルを離した。

「あゝっつい……」

八月も下旬のことではあったが、近年殊更に暑さの勢いを増している日本の夏は、相も変わらずじりじりと街を灼熱のフライパンにしていた。まだ午前中だというのに、ランニングも一息いれなければ熱中症の危険があるだろうと言わんがばかりの気候だ。腰かけた川沿いの石階段も、かなり熱い。

今日のこの日は、スクールアイドル同好会の面々はまず午前中のランニングを開始し身体を慣らしてから練習に臨むべく意気込んでいたが、思っていた以上の暑さに体力を持っていかれ、学園に戻る前に小休止を入れていた。

「もうベタベタするんですけどおっ……」

「戻ったらシャワーを浴びた方がいいわね……」

うだりながらもかわいいい声色を崩さないかすみを大したものだと思いつつ、果林も流石に辟易して汗で貼りついたシャツをばたばたと動かす。

「でも、汗をかくと頑張ってるーってならない? その後で食べるご飯もおいしい!」  
エマはふわつと笑いながら、今のこの充実感と食事への期待で胸が満ちている。

「ねえ……」

歩夢は傍らの彼女を見やった。

「なんですか?」

「何かあった? 今日、ちよつと様子が変だよ」

せつ菜は本当とでも言いたげに歩夢を見つめ返す。わずかな機微の違いから見極めたのだろうか、自分を本当によく見ていると感嘆することしきりだ。

「何!? チョーシ悪いならちゃんと言わなきゃ駄目だぞ〜!」

彼女の後ろに立っていた愛が腰を落として高さを合わせ、肩を揺さぶる。せつ菜はや、や、や、や、そーいうんじゃなくて、と揺さぶられながら返した後、

「ヘンな夢見ていただけですよ!」

不調の理由を口にした。

「夢?」

璃奈が表情を変えず、きよとんと首を傾げる。

「それはですね…夢の中で私は『ひろむくん』って男の子で、お父さんと一緒に公園で遊んでいたんです」

「男の子？」

彼方が相槌を打つ。

「そうです！夢の中で私『あれ？ 何で私男の子なんだ？ ってかひろむくんって誰？』って思ったところで、気づいたら私はひろむくんからちっちゃい時の私になって、お父さんはちっちゃい時の歩夢になっていて…」

「私!？」

変なところで流れ弾が飛んできたので、歩夢は目をぱちくりさせた。

「はい。で、虹が出ていて『あゆむしってる!？ にじのねっこにはね…』って言いかけたところで目が覚めたって訳ですが…」

ヘンな夢、と隣にいた侑は結び、一同もヘンな夢だねえと少しばかり反応に困るといった表情を見せた。

「はりきって身体動かしていたから、ちよつと疲れが出てるんじゃないですかあ？」  
かすみが侑の隣に座った。

夏休みライブに向けての準備は順調だった。

それぞれの曲をブラッシュアップして披露できるまでに仕上げる工程。衣装の準備。会場の手配。全てが順調で、逆に怖いぐらいだと笑いあったものだ。

中でも、9人が歌える新曲に対してと意気込んだ彼女は言葉通りにしつかりとやつてのけた。

そうとなれば話は早いと、この一週間でダンスとフォーメーションも爆速で詰めていくのが彼女達だ。お披露目当日までに少しでも練習して良いものを見せたいという熱意で、数日でフォーメーションを決め、夏休みをこれ幸いと朝から晩まで練習をしてきた。

「まあ、そういうのはただの夢だから……。あと一番ヘンなのはさ……」

まったく他愛も脈絡もない会話の繰り返しではあるが、これが最高に楽しい。同じ志をもつ者と集まって時間を共有するのは、こんなにも楽しいものかと。

先程まで鬱陶しいほどの暑さだった陽射しも、今は祝福のエアールにすら見えてくる。

「じゃあ、学校に行ってもうひと頑張り……。え?」

立ち上がった、歩夢が言いかけた時だった。

「何、あれ……」

歩夢が上空を指差す。一同はその指の先を見上げ……驚愕した。

時はまた戻り、リバイス達に変身完了を遂げてデッドマン退治の火蓋切っていた。

「一気に行くぞええ！」

その意気揚々とした叫びが、戦闘開始のゴングを鳴らす。特殊なデッドマンは右腕に巨大なガトリング砲を携えており、リバイスが決め台詞言い終わるか終わらぬかのうちにそれを撃ち放つ。だが、その弾丸がリバイスを捉えることはない。

「ワーオ！危ない！」

「ナイス回避だバイス！」

【オーインバスター50!】

バイスはレックス特有の跳躍力で飛び跳ねると、空中でひねりを加えながら体を回転させていた。そして、それはただの回避行動ではない。飛べば落ちる。このごく当たり前の現象をバイスは

「あらよーつと!」

「うがっ……!」

しっかりと攻撃に変えていた。二人のデッドマンは悶絶している。着陸先を敵の身体へと定め、彼は蹴りを放って二人にダメージを与えつつ地面へと降り立つ。再びデッドマンズがガトリングを撃ち放つが、リバイスの専用武器、オーインバスターで跳ね返して距離を詰めていく。一方バイスは別の怪人を相手していたが:

「固ってええ〜!!?」



想像以上の堅牢な装甲を誇るデッドマンに、バイスの拳の方がダメージを受けていた。瞬間、バイスの背中に強烈な一撃が見舞われる。複数のデッドマンが同時に攻撃を食らわせたのだ。

「あれ？もしかして俺っちピンチイ!?」

動きの止まった一瞬の隙を突き、

「楽園に捧ぐ、贄となれ。君は……子羊だ」

「!?」

バイスはデッドマンが確かに言葉を発していたのを聞き取った。長いこと怪人と手合わせしていたがこれだけ知性の高いデッドマンは見たこともなかった。あっけに取られていたバイスは振り下ろす武器に気づくのに遅れるが…

「イーグル！」

「ナイス一輝い！」

レックスゲノムを取り外すことでバイスを一輝の中に引き寄せる事で攻撃を喰らわずに済んだバイス。

ゲノムチェンジ形態

いわゆるフォームチェンジ形態。 ? 開発者であるジョージ・狩崎の趣味により、その姿には歴代仮面ライダーの意匠が取り入れている。 ? ちなみにだが、変身音にも各ライダーをイメージした一言が添えられているのだ

【カモン! イイイイーグル!】

「はっ!」

【バディアアップ!】

荒ぶる! 高まる! 空駆け巡る!

イーグル!

【お前の羽を数えろ!】

「バイス! 空中戦だ!」

「あいよお！」

【リミックス！】

リバイスシステムの最大の特徴であるリミックス変身とは、変身後のリバイとバイスが組体操の様に各ゲノムの生物を形作ることによってゲノムの力を最大限に開放する再変身。

それぞれバイスタンプによる生物モチーフの姿になる為、イーグルゲノムは飛行能力の持つ巨大な鳥の力を得る事ができるのである。

【必殺！ぐるぐる！ミラクル！イーグル！】

軽快なラップ調と同時にリミックス変身を遂げたりバイスは空を駆け巡りながら残りのデッドマンを一網打尽にしていく。

「はああー！」

「さくらら!俺たちも一気に行くぞ!」

「分かった!」

【クジャク!ダダダダーン!】

【必殺承認!】

ライブガンに装填されたバットバイスタンプのスイッチを押し、トリガーを引くことで発動。?ライブガンから黄色い弾丸か黄色い音波状の弾丸を放つ。【バッドジャ

ステイスフィニッシュを繰り出す】

一方ジャンヌは【コブラスタンピングスマッシュ】による必殺技で敵を上空に吹き飛ばし自身も跳び上がり、さくらの悪魔であるラブコフがコブラ状のエネルギーとなり右足に纏わせて、回し蹴りを放った。

「これで終わりか…」

一帯のデッドマンを倒し切った一輝達。これ以上の増援が来ない事を確認し、ひとま

ずは胸を撫で下ろしたのだが…

「キャア！」

「!!」

「何何!?!」

「兄ちゃん！後ろだ！」

謎の光弾が逃げ遅れたの女子高生に向かって飛んでいったのに気づく大二は一輝に声を呼びかけた。

「レックス！」

「はっ！」

リバイはレックスゲノムの高い運動能力向上を発動させて、一瞬にして女子高生の元へと駆け寄っては光弾を片足を蹴り返した。

跳ね返った光弾は向こうの方へ飛散していった。

ありえない光景の連続であっけにとられ続けられている多数の生徒達。

「せ、せつなちゃん!大丈夫!!」

「君、大丈夫か?」

「あ、はい…!」

「え、えーと…これは、どういう状況なの?」

「もう、全く分からないわ…」

「、ハア~~~~ツ」

「生きてんじゃん……」

向こうにいる気だるけな少女がそう動揺していたが、光弾による砂煙から聞き慣れぬ声が響いた。えっ、とりバイス達がその声がする方へと振り返ったそこには、三人の男女がいた。

「排除」

淡々と声を上げるのは、涼やかな目元を持ちながらも寡黙な印象を与える少女。年の頃は彼女達よりも下に見え、中学生ぐらいだろうか。

「なーんだ！生きてるのか！久しぶりに人間が面白くおかしく飛散した様子が見れると思っていたのにー！」

もう一人は、対照的によく喋るはつらつとした男こっちは高校生ぐらいに見える。「あんまり低いと一般人に見られるだろう？ 目立つ真似はゴーマ様も望まない……」

最後は、知的な印象を持つも何か不気味な雰囲気漂わせる男だ。しかしながら年若い他の二人に比べると、40は越えていそうに見える。そして何より「奇妙」なのは――

全員が、揃いの白い装束を身に着けていたところだ。

「何……?」

リバイスの傍らに黒髪の少女も、この「奇妙」な集団に珍しく怪訝な表情を見せた。

「リバイス! 来たようだね、この「世界」に!」

知的の男は彼女らを無視し、慣れない調子で声を張った。

「一体なんなんだ? お前らは」

「そーだそーだ! どうせお前らなんだろうー!? こんなにも悪魔は出してるのはアー!」

リバイスの様子が変わる。その調子は一瞬で、危機を察知した戦士のものとなっていた。普段お調子者のバイスでさえもより一層気を張らせて謎の三人衆を詰め寄っていた。

同好会の面々はその会話の調子に気圧され、身動きがとれずにいる。動いたらまずいことになりそうだという予感を、動物的な本能で感じ取っているのだ。

リバイスの質問に、またもや知的な男が手を広げてこう言った



「我らはギフ様、そしてゴーマ様の元に使えし使者、【ネオデッドマンズ】」

「そして、我の名はコルネア」

「オレはクーリオ！」

「私はイザベラ」

「君は今、楽園を壊した」

「つまりは…地球にとつての悪という事だ」

「質の良い癌なら尚の事、排除せねばならない」

コルネアはリバイスをじつと見据えてそう言った。リバイスは、またそれかと頭を抱える。

「またギフか……!お前らしい加減にしろ!そんな勝手な思想の話で、人の命を弄んで言い訳がない!」

「悪いけどな!オレたちは悪魔だけとお前らみたいにそんな酷いことしないもんねーっだ!あつかんべー!」

また新たな凶悪な信仰団体が現れたことに痺れを切らしながらリバイス達はネオデッドマンズにそう吐き捨てた。

ギフ、「全ての悪魔の始祖」と呼ばれる存在であり、50年前に南米の遺跡からギフスタンと共にミイラ化している状態で発見された。それからというもの、過去にも悪魔崇拜組織がギフ復活を目的として現代で多くの被害をもたらした過去がある。リバイス達が食い止めたものの、生き残った信者の傍ら達が飢えを凌いでも人を集め続けていた事によりまた新たに新勢力が誕生したのだった。それが今、リバイスの目の前にいるネオデッドマンズと呼ばれる組織であった。しかし前とは違って、ギフともう一人の【ゴーマ】と呼ばれる存在。それが一体なんなのかは、この時リバイスは検討もつか

なかった

ライブとジャンヌもリバイスの元へと集まり、ネオデッドマンズの出現に呆れを顔に出していた。

「また崇拜組織か…!」

「マジで…そのパターン飽きたんだけど!」

リバイス達仮面ライダーと新たな組織「ネオデッドマンズ」…非現実的な光景にすっかり置いてけぼりにされた少女達だったが、リバイスに助けられていた黒髪の女の子がその光景に何故か目を輝かせていた。

「これは…もしかして最新のヒーローショーですか!？」

「え?」

悲鳴、恐怖、動揺。リバイスはそう感じていたのだろうと思っていた矢先に、意外な反応を出している彼女に少し素っ頓狂な声を出した。

「お、お嬢ちゃん? 君ちよつとポジティブ過ぎなあい? おれっちが言うのもなんだけどさあ」

「と、とりあえず! そんな悠長な事言つてないで君達は早く逃げるんだ! わかってる思うけど、これはシヨーなんかじゃない!」

「おつと…勘違いしてるようですが、私達がこうして顔見せしているのは貴方達にさっきのように警告したかっただけですよ」

リバイスが立ち尽くしている少女達にそう注意を促したが、コルネアは待て待て、と手を出しながらそう冷静に説明した。

「何…?」

「お前らなんかいつまで潰せるんだよ！雑魚め！」

「それよりも計画に遵守し、慎重に、確実に遂行していく」

「成る程ねーん、それならおれっち達もここらで…って、なワケあるかよお…ッ！」

今すぐ始末しない。そんな事はいつでも出来る。自信満々に物を言うコルネア達の態度にバイスはカチンときながらオーインバスターで三人に向かって勢いよく斬りかかるうとしたが、

「あべしッ!？」

「き、消えた…!？」

攻撃が届く間 寸前でネオデッドマンズは元の場所へと帰るように姿を消していった。バイスはまるで弄ばれているように感じ、珍しく激昂した

「ムキイー!なんかムカつくんですけどー!!結局ビビってるだけじゃあーん!」

「皆さん、大丈夫ですか?」

「うん、愛さん達は全然大丈夫だけど…」

大二是新たな敵が現れた事で、後ろにいる彼女達がいる事に気づく。ネオデッドマンズによる施設、人身被害の始末は一括してフェニックスが受け回っている。とりあえずは危機が去った事なので大二是彼女達に事情聴取の依頼を要求しようとしていた。

「君達は高校生だね、もしかして…」

「あ…!はい!虹ヶ咲学園の者ですが…」

「今回の被害者として一応現場の事情聴取をお願いしたい。少し時間を取るようだけどいいかな?」

「この後我々から君達の学園に連絡を取るつもりだ…」

「分かりました…みなさん、いいですよね」

大二の説明を誰よりも率先して聞き受けている彼女は、おそろくりーダー的存在なのであろうと察した。

そんな彼女がそう言ったものの、微かながら不安な表情を一同浮かべていた。

繋がる思い!いざ闘い!

デッドマン出現の騒動の直後フェニックスの隊員達が虹ヶ咲へと訪れ事情聴取等の聞き込みを行っていた。少女達は被害者としての扱いをうけられる為、一時的に学園からの外出の禁止を命じられたのだが、等の本人達は学園が今後どう動いていくのがいつばいだった。普段の日常から一転してこれからどうなっていくのか不安が募る中、思わず口からため息を漏れ出てしまう

「はあ…」

「一時はどうなるかと…」

「まったくですよ!いきなりあんな事に巻き込まれて…のほっぺたとかに傷がついたらどうしてやろうかと!」



「そんな事より、せつなちゃんの方がよっぽと危なかったと思うけど…」

各々が心中を吐き出している中で一人の少女は俯いていた。

「りなりー、どうしたの？」

「あの人達、なんで私達を狙ったのか分からない」

「ええと、それは…」

「でも、それはさつき言ってましたね…確か」

『なーんだ！生きてるのか！久しぶりに人間が面白くおかしく飛散した様子が見れると思っていたのにー！』

謎の三人組の一人が吐いた言葉。一見自己中心的な発言にも見えるのだが、彼女はその言葉に引っかけかりを感じていた。

「…でも、やっぱりおかしい」

「失礼」

コンコン、とりズムのよい木を叩いた音がした所でその話は一旦持ち切りになる。その音の主はどうやら大二のようで、学校側の対応で少し遅れてしまったようだった。よく見ると大二の隣に一輝とさくらもいた。フェニックス所属ではないのだが、同じ仮面ライダーとして協力するようだった

「あの…お隣の方は?」

「さつき君を助けた人だよ」

「あの人ですか!? あの! その件は本当にありがたいがとうございました!! カッコよかったです!! その姿はまるで【機動守戦士アルト】みたいにシユバーン!! と参上して…」

「あ、ああ…」

「、気持ちは分かるけど、ちよつと興奮し過ぎ」

「…」

「す、すみません。」

「ま、まあ…とりあえずはみんなに言いたい事があるんだ」

「巻き込んで本当にごめん」

一輝は頭を下げた。

「そんな事ないよ!! あんなに危険な人達から守ってくれたんだから!」

「そうですよ、急いで避難しなかった私の責任でもありませんし…」

「ちゃんもそう思うよね」

「…」

「ふん!」

他の者達が静かに頷く中、不満そうに頬を膨らませて怒りを露わにしている子がいた。今回の騒動に対してそれほどの感情を抱いているのだろう。無理もないだろうと彼女に対して反論する事はなかったが…

『むむっ!この嬢ちゃん、オレっち達に感謝するつもりないみたいだなア!?!』

「(いいだろバイス、本当に怖かったんだろうし…)」

『よおし!この超絶かつちよいいバイス様がわからせやろーつと!』

「フンツて何だよオ〜!!?フーンツだ!」

一輝の耳からニユルリと実体化するバイス。非科学的な現象を前にして理解するのに数秒かかった後、まさしく目が飛び出るような勢いでそう叫んだ

「ギヤアアアアアア  
!!!!!!?」

「ハツ…。何か出てきた…?」

「今起きた!」

それまで寝ていた子が起きるほどの叫びを聞いた瞬間に黒髪の女の子が握り拳を作りながら前に出た。

「かすみさん下がって下さい!」

「いや!ちよつて待つ」

「とりやああああ!」

「アパあゝゝツ!!?」

「ああ…」

「やりました!やりましたよ!」

一輝顔負けのダイレクトパンチに悪魔のバイスも一発KOを受けてしまった。全てバイスの自業自得だろうと思いつつも、一輝達はぶつ倒れるバイスを前に仕方なく弁解しようと説得した。

「違う違う!こいつはバイス!なんていうか…その、味方だよ!別に敵じゃないから!」

「……え」

「け、警備!？」

「うん、君たちは今後狙われる可能性が高い。だから俺達でそれを阻止しようってわけ  
!」

さくらがそう言ったのは彼女達スクールアイドルの警備であった。普通の女子高生よりも知名度が高い九人の生徒が先程のようにまた襲われるのも可能性としてはあまり低くはないのと、これを機に学園の責任者が一輝達に対してそう依頼したのもあってそのような対応を受ける事になったのだ。

しかし、あまりにもぎっくりとした説明に一回り落ち着きを見せる女子高生がこう切り捨てる

「何故そうなのか説明して欲しいわ…」

「か、果林ちゃん!」

「こればかりは当事者として、ちゃんと理解していききたいもの。」

確かに今の状況で出来る事はかなり限られている。しかしそれを周知の事実として捉えているものの、何も分からずに従うのは腑に落ちないだろう。誰よりも俯瞰的に見る彼女の言葉に三人もその通りだろうとあるがままの事実を口にしようとした。さくらが取り出したのは一枚の用紙である。

「これ見て」

「これは?」

ずらりとチーム名のような物が箇条書きで記されていた。パツと見でも何か分からなかった彼女達だったが…



「【星カラストアーズ】…【Michelle】…ランドグリーン】…【ミラクルチョコレート】  
これって!」

「今まで怪人事案に巻き込まれて襲われた被害者であり、君らと同じ…」

「…スクールアイドル!」

恐らくスクールアイドルが好きなのだろう子がはっと気づき始めた。

「そういう事。多分だけど、奴らの目的は君たち…スクールアイドル?の子達だと思  
うの。さつき貴方達も襲われたでしょ?だから、その推測はほぼほぼ確定したって事」

その事件の実態というのは極めて残酷でもあり、そのグループのほぼ大半が命を落  
としてしまっている。幸いにも軽症に済んだ物もいるが、偶然の一致にしては出来すぎて  
いるこの現象にフェニックスはこの界限自体が狙われているのでは、と睨み今回の警備

依頼に繋がったのだ。

そんな衝撃の事実に胸打たれる者達だったが、眠たげな少女がポツリとこんな事を呟いた

「だとしたら、次は私達の他の子達も襲われる可能性があるんじゃないや…」

「さつき、ネオデッドマンズが君に向かって攻撃を仕掛けていただろ?」

「はい…それが何か…」

「アイツらは多分、嬢ちゃん達の命が目的だと思うぞえ?」

ヌツ、現れるバイスにまたもや目が飛び出る勢いで叫ぶ

「ギャア!! また出ましたア!」

「ええ!?! ちよつと待つてよお! ビックリさせてごめんってえ! もう襲わないからア!! 神に誓ってえ!! オレっち悪魔だけ!!」

驚く彼女に慌てて説得するバイス。どうやら先ほどの鉄拳が余程染みたのかかなりアタフタしていた。と言うものの、等の本人が「またですか!」と既に拳を振り上げようとしていたのでもう悪魔と言われても面目も立たない様子だった。しかしそのおかげで他の者達がバイスに対する警戒心を一気に解かれようとしていたのは皮肉な事である。

話を戻し、赤髪の子が質問する

「…あの、私達の命って…: どういうことですか?」

「ふふーん…: このバイスちゃん、抜け目がないので有名なのよーん!」

「悪い意味でもね」

バイスの誇張にさくらが即座に補足をした

「さつきアイツらの脳内に忍びこんだのさ!」

『奴等を殺せなかった』

「脳内って…それ本当?」

「ホントホント!ね!?!一輝ちゃん!オレッツち出来るよねえ!?!」

初対面の彼女達に疑問を投げかけられるバイス。その胡散臭さが既に露呈しているのに対して一輝に縋りついた。確かにバイスの特技としてはそのような事が出来るのは周知の上だったので、嘘をつくつもりはなかった

「ああ！これに関しては本当だ。」

その事実が明らかになった彼女達はこれからの不安がさらに加速した。

「そ、そんな…どうして」

「兎にも角にも、君達を野放しにする訳にはいかない。君たち市民を守る為に、どうかお願いしたい。」

大二がこれまでの事を総括して、同好会の者達にそう申し訳なさそうに頭を下げた。

「い、いえー!とんでもありません!!私こそこの学園委員長でスクールアイドルです!自分の命を軽率には出来ません!!」

「…それに、なんだか凄くカッコいい」

「皆さん、命を懸けて、守ってくれるなんて…」

侑は一同を見回したうえで、

「本当にすごいと思います」

それは嘘偽りの無い彼女の感想だった。

目の前で繰り広げられたリバイスの激闘。あれが彼らにとっては日常であり、使命であるというのだから。一同はそんな一輝達の願いを拒むことなく快く了承し。自分らに出来る事があれば、限りなく力を尽くそうとも思っていたのだ。しかし先程からある事が気になっていた事を皆の輪から割って話し出す

「そ、それでも！かすみ達、明後日ライブなんです！　ちゃんとライブできるんですか  
!？」

「こちらもまた、彼女達の嘘偽りない気持ちを伝えた。

「かすみさん……！　世界の危機かもしれないんだよ！」

「じゃあしず子はライブやりたいの？　やりたくないの？　どっち!？」

「それは……やりたいよ！」

女子高生……否。青春の中で懸命に足掻く若い命の見る世界は、広いようで狭い。

家庭と学校という巨大な二大コミュニティが生活範囲のほとんど全てを占めている  
のだから、それも当然だろう。

しかし、いや……だからこそ、自分の感じたものの美しさを、世俗に汚れすぎている

い純粹な目で見る事ができる。

世界の危機と、一週間後の特別なライブを同じ天秤に乗せることだって。

「その……ライブって?」

「部室の扉見てなかったんですかあ!? スクールアイドル同好会ですよ、ここは! 当然、ライブだってやるに決まってるじゃないですか!」

かすみに捲し立てられるが、一輝達はわからないといった顔をした。

「ごめん、自分も何度言っていたんだけど、スクールアイドルそのものはあまり分からないんだ……」

申し訳なさそうに大二がそう言った瞬間、ざわめきが部室に広がった。



「さくからも知っているか？」

「ウチの高校でもやってたけど…あんまり分かんない」

「当然オレツちも知りませーん！」

バイスもいつの間にか枕を抱えながらスクールアイドルの存在について一切知らなかった。「いつの間にか…」と、おそらく枕の持ち主である女子がそう悲しそうに呟いていた

「じゃあ、皆さんに説明を……！ すつごいですよ、スクールアイドルは！ ときめいちやいますから！」

そこからは侑の出番だ。彼女はこの世界の文化、スクールアイドルの存在を一から順にとうとうと語って聞かせる。それでいて雑多になり過ぎず、要約が上手いときていれば、自然と聞き入ってしまうものがあつた。

「なるほどね。学生が演出するアイドルかあ……。凄いなあ」

一輝は感想は淡々としている。こちらもまた、まだ見ぬ文化に驚き、すぐには飲み込めていないのだ。

「まあ、なんとかなるかな……」

不意の大二の発言に、場の空気が澱む。

「いやいやいやいや! 問題ないわけではないじゃないで……」

「いえ! それについては私にいい考えが!!」

かみついたかすみめの発言を遮ると、はすつくと立ちあがる。

「確かにライブの予定はあるのですが、厳密に言えば今回というのは3グループに別れてのライブとなるんです!」

ライブ。

それはもうじきに開催される物であり、全国のライバルチームの偵察や彼女のファン

や学生達がこぞって見に来る大型イベントである。通常アイドルグループは皆でパフォーマンスを繰り出すのが定番なのではあるが、彼女達はあくまで部ではなく「同好会」という立ち位置である為、自分達が持つ個性や雰囲気に沿ったライブパフォーマンスをやりたいようにやるという方針である。

QU4RTZ、Diverdiva、A・ZU・NA のようにライブ演出や曲のテイスト、振り付けの種類も彼女達の要求に応じて練習をしている。合同で練習する事もあるが、夏休みライブが間近に迫っている事と各ユニットの練習の分もある為ここ数日間はそれぞれが別れて準備を進める予定だったのだ

「学園全体が私達の為に後ろからサポートを尽くしてくれてるんです」

「結構規模が大きいライブなんだな」

「はい！なので…御三方が人グループに一人ついて頂く、というのはよいのではないでしようか！」

「まあ確かに、あの程度の奴らが来たとしても対処は…」

「出来るね」

彼女の提案に大二やさくらも納得する。

一つに集中して行動するよりユニットごとに一人いる程度であれば、ネオデッドマンズ達の目につく事は恐らく容易ではないだろう。

三点に分裂すれば被害も少なる事も確かだろう。

着々と対策が出来上がりがつつある一方で、穏やかなりボンの生徒が大二に向けてとある心配事を口にした

「あの…」

「何？」

「最後のライブの方でもしあの人達が出てきたら…」

その一言で同好会の雰囲気は段々と重くなっていた。ネオデッドマンズと称される謎の組織、まだ未知数であるあの三人の他にもそらなる強敵がいるかもしれない。そうとなれば一輝達も手が負えなくなるかもしれない。下向きな事が思い浮かぶ一方で常に楽観視なバイスが一輝の前に出た

「なあに言ってるんのように！オレっち達が巷じゃなんて言われてるか分かるかあ？」

「最強のバディなんだぜっ！」

一輝と肩を組んでそう意気揚々と主張する。一輝の方を見ても満更でも様子であった

「バディ…」

「まあ、バイスの言い方はまあアレだけど……問題が解決するまで俺達五十嵐三助兄弟

がこの世界も、君達のライブも、ちゃんと守ってみせるよ」

一輝がまた立ち上がり、堂々と宣言した。多少の発言の訂正をされたバイスは「どういう事だよお!」と不服そうな表情を浮かべる（とはいえ顔には出ていないのだが…）

「決まり……みたいだね」

侑が立ち上がり、

「でしたら……」

「よろしくお願いします!」

手を差し伸べた。

「(こ)ち(ら)そ(そ)! よろしく!」

一輝もその手を握り返す。

本来決して交わることの無い、ふたつの人生のものがたり。

それが今、確かに繋がった。

手と手を繋ぐ思い!リバイスのパワー!

「そういえば名前、まだ言っていなかったね。俺は五十嵐一輝!よろしく!」

「高咲侑です」

「上原歩夢です」

「大二だ」

「かわいいかわいいかすみんです!」

「もつと可愛いバイスちゃんです!」

「五十嵐さくらだよ」

「桜坂しずくです」

「朝香果林よ」



「宮下！ 愛！ さん！ でーす！」

「近江彼方だよ〜……」

「エマ・ヴェルデだよ！」

「天王寺、璃奈」

「優木せつ菜です!! よろしくお願いします!!」

「？」

「（確かあの子の名前って…）」

「（…いや、あまり気にしなくてもいいのか）」

互いに名乗り終わった時に優木せつ菜という少女に違和感を感じた一輝。

「それじゃあ、手分けしてやることやっけていきましょう! 皆、自分の仕事でわからないところある?」

声を上げ、行動開始を促した。一同は口々に大丈夫、わかってるよと返していく。

「…でしたら、せっかくですしここの道案内も兼ねてご紹介しましょう!」

皆の反応を見たせつ菜は、そう立ち上がりながら元気よく皆に言い伝えた。

そろそろ時間は正午になろうとしている。

夏休みなので学期中に比べれば人は少ないが、それでも巨大かつ各個の活動に力を入れていく虹ヶ咲学園のこと、廊下で度々人とすれ違う。

「ウツヒョー!!何ここめちやくちやデカいんですけどー!!?」

「ふっふっふ……！　このぐらいで驚いてちやいけませんよ？　ニジガクの凄さはこんなものじゃないですから！」

驚くバイスの前を、せつ菜はまるで秘密基地へと案内する子供の如しのテンションの上げようで先に立つ。

「あ、スクールアイドル同好会！　お疲れ〜！」

「流しそうめん同好会じゃーん！　おっつおっつー！」

流しそうめん同好会の部員たちとすれ違った。愛が嬉しそうに挨拶を返す。

「そういえば次夏休みライブでしょ？　なんとか出来るの？」

既に生徒たちの間ではデッドマン襲撃の件について知れ渡っている。現状では平日はおろか、休日や用のない時は登校の禁止を命じられてる。そんなピリピリとした状況の中で、予定されていたライブの様子に関してのははつきり言ってもあまり見込みが良くないだろう

しかしながらもかすみが間に入ってこんな事を口にする。

「それについてはノープロブレム!!何故なら…かすみん親衛隊の御三方がいますから！」

そう胸を張りながら一輝達にフォーカスを合わせる。あの話の後に彼女は自身の気持ちを入れ替えていたらしく、先ほどまでの険悪感はなくなり自分達を守る味方として思っめくれている。しかしながら「かすみん親衛隊」という何度も言い難い扱いにバイスもヌツと現れる

「かすみん親衛隊いん…?」

「…ななななーんて…冗談に決まってるじゃないですかあ…そんな顔しないで下さいよお…?」

目を逸らしながらもぶりっ子を演じる。怖がりな彼女はただでさえドスの効いたバイスの反応にビクビクと震え上がった(勿論バイスは脅すつもりはないのだが…)

「やめろバイス」と、一輝はバイスを引っ張り上げた。

「ま、そういう事だから安心してよ！アタシ達に心強い人達がいるんだからさ！」

そうにこやかな笑顔で同好会に向けて不安を払拭させた。同学年のみならず、多学年でも信頼や交友を得ている彼女の言葉は、先ほどの不安を掻き消すように消えていった。

「うん、そうみたいだね……！」

「それならば、必ずライブ行くから頑張つてよね！」

「ありがとー！ そつちこそそろそろ夏終わるんだし、また流しそうめん大会やるなら誘つてよ〜？」

「もちろん！」

スクールアイドル同学年と流しそうめん同好会の部員は、歩きながらそれだけ会話を

交わした。仲が良いな、と一輝は流しそうめん同好会の方を見るも自分達もそれほど信頼されているのだと確信した。今さつき出会ったのにも関わらず、自分達の命をこうして預けてくれている。

「必ず俺たちが守ってみせる」

奴らの手から必ず阻止しなくてはならない。

すれ違っていく部員たちは、皆一様に個性豊かだ。そんな学園の幅広い自由な高風に  
圧倒される一輝達

「流しそうめん…」

「なんか色々すごいね…」

「俺の学校より随分凄いな…」

見渡す限りでは他にも色々な同好会を目にするが、偶々目の前にあつたぬいぐるみ同好会に気づく三人。

「( )は？」

「つい最近出来たばかりだと思います。昨日あたりはなかったので」

「何これめっちゃ可愛いんだけど!!」

「私より劣りますが確かに中々可愛いですねえ！」

それぞれが部屋の中に入るとカラフルな色調が目立つ空間でだ沢山のぬいぐるみが重なって置いてある。もはや同好会とはなんなのか疑うレベルだが、それもまたこの学

校の強みとも言えるのか…。

「(なんでもありませんだ…)」

呆気にとられながらも一輝は辺りを見渡す。しかし一輝は何か違和感を感じた。

「あれ?もしかしてあの人が…」

生徒達に紛れて可愛らしい熊のぬいぐるみを愛でていた一人の男…

「…誰かと思えば、一輝達か」

「ええ!?!ヒロミつちい!?!何でここにいんのお!?!」



「な、何者…!？」

学園に謎の男もいれば同好会はおろか、一輝達でさえもヒロミの登場に驚きを隠せなかった。気だるげなも思わずそう言い放つと、ヒロミは立ち上がって自身の名を口に出す

「フェニックス所属司令官の門田ヒロミだ。まあ、今先程大二とここの訪問をしに来たのだが…」

「…あの人ってそういう趣味なの？」

少なくとも大の大人、しかも厳正で規律正しい特務機関の男がぬいぐるみを片手に生徒と共にいるのはあまり普通の事ではない。むしろ異常に入るのかもしれない…

もヒロミの行動にやや後退りしながら同じフェニックス所属である大二に言う

「こういう系は確かに好みだとは言ってたけど…」

人々を守る組織の人間らしく、真面目な人物……なのだが空回りするタイプでもあり、自分の行いのせいで状況が悪化してしまう等、間が悪いのか不憫な体質の持ち主。司令官だった頃の癖が抜けないのか、時折り指図するような口調になる。

しかしその正義感の本物であり、降格されながらも任務を遂行したり、同僚や部下とのコミュニケーションを絶やさず、また一般市民を囮にした作戦に苦言を呈する常識的な人物でもある。

しかしながら、今の状況のように可愛い物を好む性格でもある。特務機関で幾多の激務をこなしていれば精神的疲労も半端ではないだろう。その為さくらの悪魔であるラブコフに対しても深い介護欲を刺激された過去がある。

彼の説明はここまでにして、大二が現れた事で自身の目的を思い出し「俺はここで失礼する」と同好会の生徒たちに告げると、同じ同志として接したからか物寂しそうにする彼女達

「ヒロミさん、もういなくなるんですか?」

「ああ、知人が来てな。ありがとう、楽しかったよ」

「(仲良くなってる…!?)」

会って数秒かもしれないが、ここまで親密度が深くなっている事に目を見開く

「あ、ちなみにヒロミっちも俺っち達と同じ仮面ライダーだぜ!」

「本当ですか!?!」

ガバッ!とまたもやヒーロー好きが表に出た事でせつ菜はヒロミの元へと駆け寄ると、手を掴んでこう言った

「是非、よろしくお願いします!!街のカッコいいヒーローとして!!!」

「ひ、ヒーロー…!」

ヒロミは大義を重んじて日本の悪事から国民を死守してきた。デモンズドライバーと呼ぶ禁断の武器と共に戦うその姿は誰が見てもヒーローと言われる物だろう。自身が最も求めていた言葉を間近に聞いたからこそ、唐突に目頭がガツと熱くなったのだ。

「(泣いてる…?)」

とはいえ、彼の事情をしらない彼女達からすれば大の大人が突然女子高生を前に泣き顔を見せれば困惑するのも無理はない。

「(ヒロミさん、あういう純粋な子に弱いからなあ…)」

そんな場面を見ている一輝も、彼女の子供のような純粋無垢な言葉がヒロミに効くのも周知の上。

そろそろ皆の目線がキツくなつた頃で、ヒロミは気を取り直して本題に入ろうとしたが…

「…ツ、んっんん！まあ、仮面ライダーとしては当然だ。よし、早速だが、皆の知恵を借りて作戦を作るとしよう！」

「早速会議だ！」

「あ、もうそれ終わりました」

「!?」

午後四時、今朝の事件が大々的に報道されてネットや世間の声が虹ヶ咲へと向けられ

ており双方の意味で注目的となつている。デッドマンズによる被害はとどまる事なく各区域で起こりつつある中、仮面ライダーの他に大勢の機動隊が被害拡大を防ぐ為に学園のみならず、様々な重要施設に厳重な警備体制を施している。新生デッドマンズとフェニックスの未だかつてない緊迫なせり合いが続く頃に五十嵐一輝はフェニックスの研究施設ラボに訪れていた。

「お、来たみたいだねえ」

「ハロー、一輝」

そこには、何日も居座つてであろう大量のエナジードリンクが山積みになつて置かれている。そんな長期間に渡つて研究を続けているその男の名は、ジョージ狩崎。

軽薄かつオタク臭さに満ちた言動ながら、学者としては紛うことなき超一流の人間。

堅苦しい「学者」のイメージとは真逆の人当たりの良さを持ち、人見知りも無く時にグイグイと迫る行動力を見せる。？リバイスとして成果を上げている一輝に対しては特に協力的で、積極的にサポートしている。

「こんにちは」

「すみません、早速なんですけど…用件ってなんですか？」

一輝は先程ヒロミから「狩崎がお前に用があるそうだ」と告げられていた。要件は狩崎にしか聞く事が出来なかった為、時間の余裕がないのも含めて一輝はせかすように本題に突入していた。しかしながらそれは狩崎も同様だった

「そうだね、こちらもある限り時間がないから早急に説明するでしょう」

狩崎とそう取り出したのは一輝が既にかけていたバリッドレックスバイスタンプ

だった。仮面ライダーリバイスの第一強化形態の変身アイテムなのだが、その複製品と思わしき物に一輝は疑問を浮かべる

「それって…」

「勿論ただのコピー品なんかじゃないよ?あの時はただの悪戯だったけど、このバリツドレックスはバージョンアップさせた強化品だ」

バリツドレックスは氷の特性を兼ね備え、同時に十種のバイスタンプの力をゲノムリミックスできる代物である。しかしバイスに方では元のレックスゲノムそのままですらに変化が無かった。「やろうと思えば」バイスの強化も可能だったらしいのだが、以前ジャツカルゲノムのデザインを酷評された事を未だに根に持っていたジョージがバイスに対して「御預け」を喰らわせた

一応真面目な理由を挙げるのであれば、本来は悪魔に頼らないリバイ単独でのシステム運用を想定して作られたため、バイスの強化をそもそもコンセプトの時点で視野に入れていなかったせいでもあったのだ



今回はバイスの強化プロセスを組み込んだのだと狩崎はそう述べた

「だから、一応…ね？」

「分かりました…ありがとうございます！」

すると帰り際に何か思い出した狩崎は一輝に声を呼びかけた

「あ！そうだ…もう一つ言い忘れてた！」

「最近のデッドマンについてなんだが…少し分かった事がある」

「で、デッドマン…？」

「フェニックスが採取してくれたデッドマンのデータを元に分析していたのだが…これはギフから出た通常のデッドマンの亜種かもしれない」

カタカタ、とフォルダを漁りながらも狩崎はそう説明した。

「今のリビスでは、人と悪魔を分離する事は出来ないだろう。」

「…場合によっては非情な決断を下すしかないという事を、一応頭に入れて置いてくれ」

狩崎の一層強まった言葉に心臓が強く打たれる一輝。彼の言うように人間と新たなデッドマンが合わさった場合の救済措置はないという状況に、一輝自身もまたより力を入れる事を決心するのだった。

「おはようございます!!」

せつ菜の声に、朝からテンションが高すぎると一輝は笑ってしまった。

強力な協力者を得た次の朝、一輝をはじめとする仮面ライダー御一行様は身支度を整えて再び部室に集合していた。一輝は着替えも兼ねて昨日のうちに揃えた半袖シャツにハーフパンツ姿で夏の装いだが、一方で大二是フェニックスの装備服でさくらに関しては現役高校生である為制服の姿で来ている

動きやすさと冷え対策でサマーニットを中心にするこれまた夏の装いにした一輝が、大二達をちらつと見て気まずいな、とばかりに苦笑いした。

「それじゃあ皆さん、今日も色々準備なんで……よろしくお願いします!」

侑は場を取り仕切り、一同に声をかける。

「俺達の仕事の割り当ては?」

大二が端的にそう問う。

「まあ、こんな感じで」

侑はノートを出し、ページを広げる。そこには一輝達から聞いた今後の行動の予定を基に、同好会とライダー一行である程度均等になるように仕事割り当てられていた。

「ふむふむ…なるほどねー、全然わかんなあーい!」

近隣の商店、飲食店にお願いして今回のライブのパンフレットやステージに広告を出し、その代わり広告費を出してもらい予算を集める。その他には衣装の縫製、衣装のデザイン、ダンスのフォーメーションの詰めなど…

その大半は完了済みで後は仕上げのみだがそれでも本番前にやる事は山のようにある。

とはいえ警備の他に作業の補助までやっってもらうのは流石に手が負えないだろうと思ひ、今回は警備のみに専念もらう事になった。

「俺が担当するのが…」

「かすみん達ですね！」

「よろしくお願いします」

「お願いします〜」

「さっちゃんはアタシ達だね！」

「さ、さっちゃんって…私の事？」

「そーそー！可愛いじゃん？」

「ふふ。大体は同じ年代だからタメでいきましよう？」

「ねーねー！俺っち達はあ!？」

「お二人は私達三人です!」

「五十嵐さん、バイスさん。よろしくお願いします!」

「…お、お願いします!」

「…ただそうになると、侑ちゃんが残っちゃうね」

「あー…まあ、でも別に」

「問題はない」

彼女の言葉を被せるように口告げる男はの後ろにいた。

突然の登場で同好会一行はその男の方へと目線を移して驚いた。ぬいぐるみ同好会で立ち会った門田ヒロミである

「あ、貴方は…」

「ヒロミつちいつの間に行ったのお!？」

「さつきから聞いていたぞ…俺もフェニックス所属だからな…」

「君の身柄については、俺が責任を持って…いや、命を懸けて保障しよう」

「い、命って…そんな大層な事では…」

「いや、大層な事だ」

の言葉を遮るようにヒロミは今の現状を皆に伝えた。今や既に被害者は膨れ上がっている事、ネオデッドマンズの脅威について、そして…その親玉の謎について。

「状況は我々が思う以上に深刻だ」

「だが…心配する事はない、何故なら！」

「何故なら?」

一輝がその言葉を繰り返す

「俺というスーパーヒーローがいるからだ!!!」

カツ、と目を見開いてヒロミはそう豪語した。数秒の沈黙と共にやや気まずい雰囲気  
が漂う。流石の大二も自身の上司の妙なテンションについていけなかったと共に少し  
呆れを浮かべている模様…

「もしかして…私、余計な事言っちゃいました?」

せつ菜は一輝にこう疑問は投げかける。

「…まああの人、結構純情な人だから」



彼女からヒロミへと視線を戻した後、またせつ菜に向けてフオー気味な返答をする。何はともあれ、ヒロミはかなり頼りになる存在だ。少々行き過ぎることはあるが、誰よりも人を思う気持ちは人一倍ある。それだけで心構えは大分違うだろう。

おっほん、と咳払いをしたかすみは空気を切り替えて早速行動に移そうと呼びかける。「で、では！頼もしい人も来て下さいましたので、早速準備に取りかかりましょう！」

「そうね、時間はあまりないし…」

「善は急げと言いますものね」

ぼつぼつと、各々がライブに向けた準備を始める声上がる。それにつれて彼女の声も大きくなった。何故あそこまで気合いの入りが違うかと言うと、何を隠そう彼女こそこの同好会の部長に当たるからだ。正確にいえば「自称」の方が強いが、否定する理由（したところで泣きそうな事が想像つくので）もないという事で事実上はそういう風になっているのだが…

「そのとーりー!と、いう訳でかすみん率いるこの同好会の成功を願って!皆さんで手を合わせましょう!」

そう振り返った先にはいつのまにか皆の姿はなく、よく見るともう部室の抜けてそれぞれの場合へと移動しているのが分かる。決して差別している訳ではないがまたもやガン無視されたとかすみは落胆する

「なんでいなんですかあ…!?!」

自分のリーダーシップさを発揮しなかったがその願いは叶わず。と、思いきや肩を落とす彼女の他に実はもう一人だけ残っていたのだが…

「安心しな、俺つちがついてるぜえ…」

「…」

「…」

「…ぬわあんで貴方みたいな人だけが乗り気なんですかあー!!二人きりなんて絶対イヤですうー!!」

「あーツ!?超絶ナイスガイのバイスちゃんに今嫌って言ったなー!?」

「ぎいいい!こつち来ないでえ!」